

# 金沢大学 資料館だより

No. 4

KANAZAWA UNIVERSITY MUSEUM NEWSLETTER



小磯良平 「婦人座像」 エッチング 258×294

(1963)

## 目 次

小磯先生のエッティング	2
「明倫堂」と「経武館」	4
志賀潔博士と揮毫	6
白糸威六枚胴具足	6
水谷清作「闘牛」	7
資料館からのお知らせ	8

金沢大学資料館  
〒920-11 金沢市角間町  
TEL : 0762 (64) 5215

## 小磯先生のエッティング

今井治男

金沢大学教育学部教授

新春一月、資料館展示室において「資料館収蔵資料と現代版画展」を開催する予定で準備を進めている。収蔵資料に加えて陳列する版画作品は、福沢一郎、山口 薫、猪熊弦一郎、脇田和といった洋画界重鎮のリトグラフ試刷り、そして私の恩師小磯良平先生のエッティングも数点陳列したいと考えている。私的なことながら先生の制作の場に立ち会った思い出も深いからである。

小磯先生といえば大正末期、東京美術学校開校以来の秀才といわれ、在学中、帝展特選という華やかなエピソードを出発点に、油絵において卓越した描写力と、気品の高い典雅な画風で活躍されていたことや、昭和58年には文化勲章を受章されたことは人々の記憶にまだ新しいであろう。更にさかのぼって先生の足跡をたどれば昭和16年の朝日文化賞、17年の第一回芸術院賞、そして30年第三回現代日本美術展大衆賞と受賞をかさねておられ、神戸銀行本店の壁画「働く人々」、迎賓館赤坂離宮の壁画「音楽」「絵画」など大作の傑作も残されている。

しかし、先生は油絵だけでなく版画にも若い頃から親しまれ、なかでもエッティングについては総数百点をはるかに超す制作があることを知る人は少ないのでなかろうか。

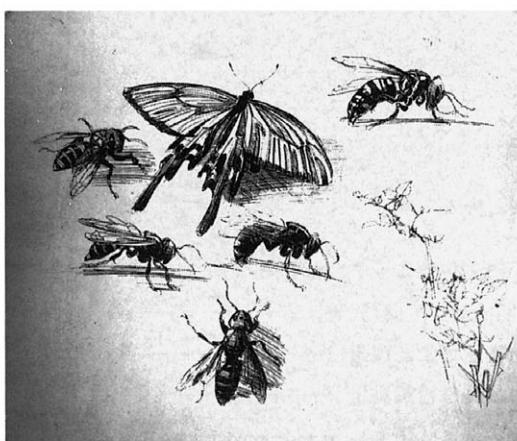
昭和の初年といえば版画に対する認識はまだ極めて低く、版画は「半画」と蔑視されていたそうであり、学校教育でも版画は手工の一部として年賀状制作程度にしか扱われなかつたような、その時代からすでに版画に価値を見出され愛着をもたれていたことになる。昭和42年発行の雑誌『アトリエ』に先生の書かれた次の回想文がある。

「私が版画を始めたということになると40年近くにさかのぼる。石版をやったのが手はじめである。それからしばらくしてエッティングもやってみた。しかしそれに打ち込むというほどでなく、中途半端なものであった。ただ歴史が長いというだけのことである。知人の印刷工場をのぞきにゆくことに興味を覚えてのことであ

る。それが動機であった。誰にも教わらないで勝手にやっていたので、面白さがいま一つということで技法の知識もないままに終った。学校の版画教室をのぞくようになって、初めて種々の設備が版画の技術と結びつく様子を理解することが出来た、というしだいである。」

この控え目な文章と異なり、その頃のアメリカ巡回日本現代版画展に日本代表メンバーの一員としてすでに名を連ねておられた。そこが先生らしい謙虚さといえようか。昭和8年に発表されたリトグラフ（石版）が先生にとって最初の版画制作であるが、以後エッティングに興味をもたれたようで、アトリエにエッティングプレス機を置き、小野忠重先生に手ほどきを受けられたこともあったらしい。

しかし何と言っても、本格的にエッティング制作を始められるようになったのは、昭和28年東京芸術大学油絵科教授に着任されてからであろう。大学には版画教室がありエッティングやリトグラフの設備を整えていた。（しかし、まだ活動自体細々としていたこの教室の体制を整え、一層充実させるよう提案されたのも小磯先生である。）先生は油絵指導の合間にしばしば版画研究室に足を運ばれ、エッティングの試作を繰り返されていた。自分で版を削ったり磨いたりされることはなかったが、若い人に準備させた銅版に



小磯良平「蝶と蜂」エッティング 210×181

(1963)

素早い線で人物像などよく描かれた。

エッチング、即ち腐食銅版画は銅の板に鉄針で線を描き、酸で腐食して凹部を作り、その凹部にインクをつめて紙に刷るのであるが、この線の効果には深遠な不思議な魅力があり、そしてまた、過ぎた時代への郷愁を誘うような美しさがある。線の素描を好まれた先生はこの魅力にひたろうとされたのであろう。

試作された男子裸像から、馬などを組み合わせた構図研究的群像などの数々の作品には、古画の美しさを現代の器に入れて再現させた感があり非常に興味深い。また先生はルーレットやベルソーといった点刻の用具も工夫して使われていた。

このような試作を経て本格的な制作にはいたる昭和38年頃は、私も版画研究室助手として勤務を始めた時期であったから、版の準備や製版、刷りと手伝わせていただき、若い頃の懐かしい思い出としている。

腐食に使う硝酸は生き物である。その濃度は勿論のこと、気温、使用頻度、版のニスの濃淡、筆圧によって、そして全く理解できない理由によっても腐食の進行が異なるのであるから、大先生の作品の腐食は全く冷や汗ものであった。自分の作品なら多少の計画すれば、それなりに手を加え工夫していくのであるが、あずかった作品は、間違えてはならぬという緊張がいっぱいだからである。後年、「小磯良平銅版画集」をまとめられた益田氏にこのことを告げたら、その初々しさがかえって作品を魅力的にしているとうれしいことを云ってくれた。

実際に失敗したこともある。七月の暑い日、銅版でなく、亜鉛版に描かれた作品を硝酸の中にいれたら、凄い勢いで腐食を始め版の周囲のニスまではがれてきたことがあった。穏やかな先生は何も云われなかったが、内心はどうであったか。刷り上げた結果は、版の周囲に数カ所ボンヤリした、しかし除去しようのない汚れが見える。あえて弁解すれば、絵の空間が把握できていれば汚れもそれなりに生きてくるもので、



小磯良平「すずめ」エッチング 252×300 (1963)

エッチング独自の面白い効果が偶然とはいえていたと云えなくもないと一。丁度一部の小説家が、写真植字全盛の今日、あえて鉛の活字印刷の力強さを好み、活字の一部が摩滅欠損していることにも風趣を感じるようにである。この作品は、先の銅版画集にも載せられているところをみると編集氏はこの汚れの美を認められたのかも知れないとその後少し安心もしたりした。

しかし、先生は放埒な人ではない。正面から事にあたる技術を重んじる人であった。情緒に流されることを好まれなかった。感情を理性で統御した構成力、描写力に優れた画家であった。アングルの知的精緻さやドガの的確な構成力を吸収され、それを足場にして清潔で気品の高い小磯芸術を築いておられた。

大概のエッチング作家は強弱の線を幾重にもかさねるため、腐食を何度も繰り返すが、先生の場合は一気に線描し、腐食は常に一度きりであった。一気の線描で形を鋭く把握する新鮮さを好まれ、すでに凹部となった線の上に再び線を重ねて版づくりする工芸的ともいえる手法には興味を示されなかった。それはメゾチントという黒い地を磨きだしていく技法の場合でも同様で、非常に微妙な階調を確認しながら描き進めなければならないにもかかわらず、試刷りを繰り返すことなく、一回で成功させてしまわれ

## 収蔵資料紹介

### 「明倫堂」と「経武館」

— 加賀藩の文武学校 —



上：明倫堂 下：経武館

加賀藩において家臣団の統制を制度化し、「改作法」の完成による土地・租税制度の確立の後に、五代藩主綱紀が登場する。綱紀は学問に造詣が深く、木下順庵、室鳩巣ら多くの著名な学者、文人を加賀藩に招くとともに膨大な数の図書を収集し、以後の加賀藩の文化の基礎を築いた。また、綱紀は元禄4年（1691）の「大願十事」に学校造営の意を示したが、実現には至らなかった。

100年後の寛政3年（1791）、十一代藩主治脩は学校造営に着手し、翌寛政4年（1792）3月、初代学頭新井白蛾を招き明倫堂が開校された。

明倫堂の師範には、広く藩臣及び陪臣の中から人材が求められ、白蛾の子新井升平をはじめ、陪臣等がこれにあたった。なお、寛政4年の下達に「四民教導」がうたわれているが、実際に藩臣とその子弟が教育の対象であった。

明倫堂の学科としては、寛政2年の松平定信の「寛政異学の禁」を受けて朱子学が中心であったが、そのほかに和学・漢文・漢医学・算術・筆道・習礼・歴史・天文・暦学・詩文・法律・本草学が挙げられていた。寛政4年の明倫堂定書の第1条では五倫の道徳を示し、第4条では「講習は聖經賢伝を本とし諸賢儒正説をも兼読

る。この妙技は描写力のなせる技であろうか。

それにしても、これらの作品に見られる堂々として、且つ温かみのある存在感はどのような理由によるものだろうか。版画史家であり木版画家であった小野忠重先生はよく「君達は小磯先生の本当の良さを理解していない」と我々に苦言を呈された。つまるところ、人間存在の尊厳、そして人間愛が中核にあることを見逃していないのか、ということであったろう。

小磯先生はモーツアルトの音楽を好まれた。そして一方、学生達との酒席ではよくロシヤ民謡を所望された。ロシヤ民謡を聞くと涙が出るとも云われたことがある。しかし、こんな酒席で御自身が歌われるのはいつも贊美歌であった。先生の親友である詩人竹中 郁氏は述べている。

「気品を支えているのは或種の哀愁である。この哀愁の底には、少年時代には生母から、長じては養母からそそがれたキリスト教思想がしみこんでいて、その人間愛がもたらす哀愁と言えそうである。」と。これは先生の全作品についていえることであると思う。

昭和63年85才で他界された。飾りのない簡素な教会での葬儀。先生のお顔と共にいつも思い出されるのは、部屋をたばこの煙でもうもうとさせて「すずめ」制作に熱中されていた姿である。

（資料館長）

前館長貞末先生の転出にともない、平成4年4月より後を引き継ぐことになりました。本稿をもって挨拶にかえさせていただきます。



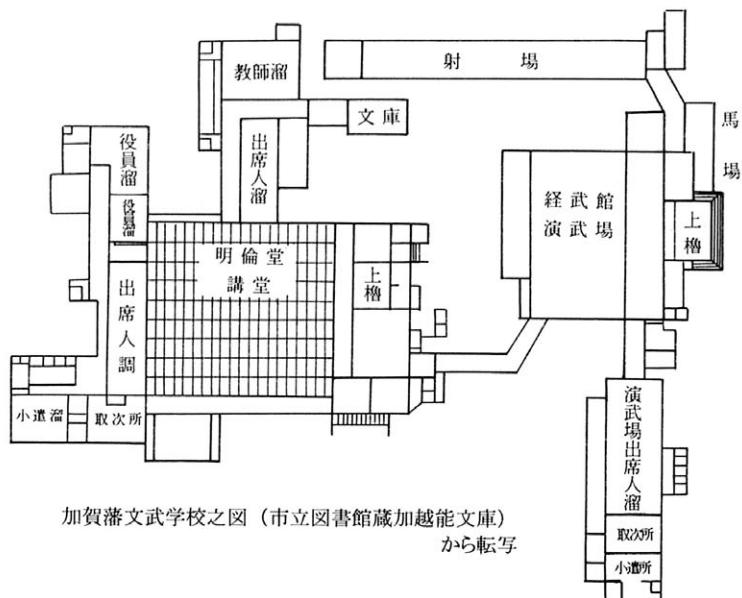
\* 「資料館収蔵資料と現代版画展」は、平成5年1月18日(月)より29日(金)まで資料館展示室で開催の予定です。

し 又本朝先哲の書も其正しきを撰て用ゆべし 異端邪説等聖經に害あるの書は一切禁ぜられ候」とあり、明倫堂での思想の方向を明らかにしている。その後明倫堂では、享和・文政・天保の三度の学制改革を経るが朱子学の重視は明治3年(1870)の廃校まで変わることはなかった。

文武の文の明倫堂に対して、武にあたるもののが武学校・経武館である。創立は明倫堂と同じ寛政4年である。その年の経武館定書には、怠慢なく武芸を心掛け、家々伝來の兵法・流派を守り、師の伝えに

従い、勝敗にこだわることなく、忠誠の志を持ち、稽古に真面目に取り組むこととある。学科は馬術・槍術・剣術・柔術・軍螺・組打であった。藩臣が選出した各流派の武術にたけた者を師範人とし、日常は師家で学び、定められた日に経武館で講習した。その後の学制改革で課目は多くなったが、それらは安政元年(1854)に加えられた砲術を除けば全て旧来の武術であった。

19世紀初頭、度重なるロシアをはじめ欧米列強の日本海渡来により、十三代藩主斉泰は日本



加賀藩文武学校之図（市立図書館蔵加越能文庫）  
から転写

海防の必要性にめざめ、明倫堂・経武館に並行して安政元年(1854)加賀藩洋学校としての壮猶館を創設した。学課は砲術・合図・医学・航海・測量・洋算・馬術・喇叭であり、ここで加賀藩に初めて洋学が導入された。明倫堂で幕末に向かい増え現実から遊離していく朱子学が講じられている間、壮猶館では時代の要請に対応していたといえる。明治元年(1868)、経武館は壮猶館に併合され、武学校としての歴史を閉じた。

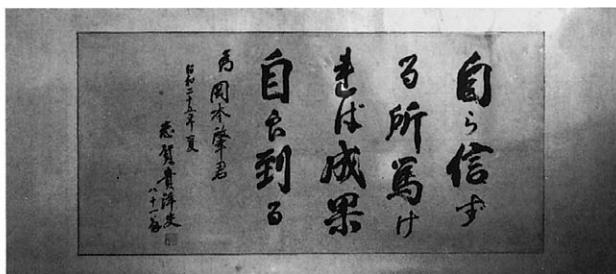
当資料館は、「明倫堂」「経武館」の2点の扁額を所蔵している。「明倫堂」は、初代学頭新井白蛾、「経武館」は加賀八家のひとつ前田土佐守直方の筆とされる。額の細工については、「額細工人之儀は 明倫堂之額被仰付候細工人 沢阜忠平儀 細工も格別宜敷様子に御座候間 忠平へ被仰付に而可有御座哉と遂示談申候」(学校方覚書)とあり、両方とも同一職人の手によるものとわかる。扁額は石川師範学校、本学教育学部を経て、平成元年(1989)資料館の設立と同時に移管された。



巖如春「加賀藩年中行事図絵」より  
明倫堂・経武館（金沢大学附属図書館蔵）

## 収蔵資料紹介

### 志賀 潔博士と揮毫



志賀博士は、日本画をよくし、またその能筆は自他ともに許すところであり、揮毫を求められると快くこれに応じたという。この墨跡は本学岡本 肇名誉教授が博士より贈られたもので、医学部薬理学教室正印 達教授のもとに保管され、この秋当資料館に寄贈された。

17世紀顕微鏡の登場から出発した細菌学は、19世紀になってパストツール、コッホの両雄によって確立された。同世紀末には今日我々の知る病原細菌の大多数が発見されるに至った。この時期多くの日本人研究者が進出し業績をあげた。志賀博士もそのうちの1人である。

明治29年、東京帝国大学医科大学卒業後、伝染病研究所に入り北里柴三郎に師事した。博士

自ら信する所 篤け連ば  
成果 自良到る

為 岡本 肇 君  
昭和二十五年 夏

志賀 貴洋史  
八十一翁

はウィダールによって発見されたチフス菌の凝集反応を応用し赤痢菌を発見した。大学卒業の翌年27歳の時である。

明治34年ドイツに留学。エールリッヒに師事する。エールリッヒは細胞と色素の親和性を利用して、病原生体とのみ結合し、人体の臓器は素通りしてしまう色素を、トリパンゾーマという病原体に求めようとしていた。共同研究者であった博士は果てしない試行錯誤を繰り返し、ついにトリパン赤という色素を得た。この研究は化学療法の最初の報告として注目された。

帰朝後は伝染病研究所を経て北里研究所の創設に尽力し、慶應義塾大学教授、京城帝国大学教授、京城帝国大学総長等を歴任。昭和19年文化勲章を受章した。同32年死去。

### 白糸威六枚胴具足 江戸中期（兜鉢 室町末期）



兜鉢は銘「明珍勝家」。鉄鋸地三十二間阿古陀形星兜鉢に鉄板物黒漆塗鰐頭鎧五段を黒糸にて寄毛引威、耳糸畦目は啄木打組、最下段は黒漆塗革包、菱縫は紅糸と白糸の違い二段。裏は金箔押。吹返は金唐革を張り覆輪を巡らす。六角に左三つ巴の据文あり。天辺は玉縁、抱花、小刻、上玉、裏菊、透し菊、表菊の七重。笠印付の鎧は天辺中央から8.5cmで、小刻座・丸頭鉢の鎧台に鎧を通す。鎧には啄木糸が付されているが、一部を残し欠損。眉庇は、当世風鉄板に金唐革を張り覆輪を巡らし三光鉢で留め、吹返と同仕立、裏は朱漆塗。一本角本に真鍮製の加賀藩直臣の合印「金猪の目」の前立を据える。鉢裏は、桜木綿地に紅縮緬地百重刺の浮張で縁韋は黒無文韋。紅縮緬丸縫の忍緒。頬当は鉄鋸地の越中頬。垂は鉄板物黒漆塗四段白糸素懸威で、耳糸畦目は啄木打組。最下段は金箔押黒漆叩塗。

胴は鉄地黒革包仏胴六枚胴を両引合。胸板は白糸毛引威、押付板は肩上と一続きで後胴とは蝶番留。右胸に采配付鎧、左胸に手拭付鎧が打たれ、肩上に茱萸を備える。鼻紙袋の取付け穴を残す。胴中

## 水谷 清「闘牛」

明治35年：岐阜県生まれ。

川端画学校で修学。小杉法庵に師事する。

昭和2年・4年：春陽賞受賞

4年より6年まで滞欧。仏伊英西に遊学。

昭和6年：春陽会会員になる。

〃 11年：インド遊学。翌12年帰朝。

〃 15年：文展審査員。毎日国際展出品。

〃 31年：金沢大学教授（41年退職）

〃 32年：ベニスアルテスにて芸術院主宰個展。

〃 34年：高島屋にて個展。

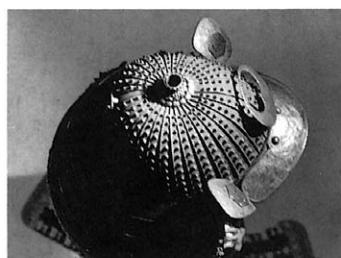
〃 52年：8月15日75歳で死去。

この作品は、昭和34年第36回春陽会展に出品された作品である。当時、氏はスペインに旅行しており、その際取材したテーマによるものであろう。スペインの闘牛は日本人にとってはまったく鮮烈な印象であって、制作意欲の湧く題材である。しかしこの作品は単なる写生ではなく、厳格なコンポジションで構築した造形美の世界を力強く、華やかに表現している。前景の大膽で立体的な組み立てに対して、背景に属する観客席の人物の極度に単純化した平板な扱いは造



水谷 清「闘牛」 油彩 40号

形的効果をさらに盛り上げている。これは氏の佳作であろう。



中央に「都是膽」の文字及び雲形金物を付す。背面は総角付の台座を設けるが、総角・総角付の継は欠。鞋は象牙。草摺は七間五段、黒漆塗革板札を白糸素懸威。耳糸は啄木威。据板は金箔押黒漆叩塗、萌葱糸と紅糸の二段菱縫。裏は金箔押。

袖は欠。

籠手は茶色地に紺糸亀甲雲模様の家地に、雲車の紋金と上膊部に三、四、三本の小簾を麻の

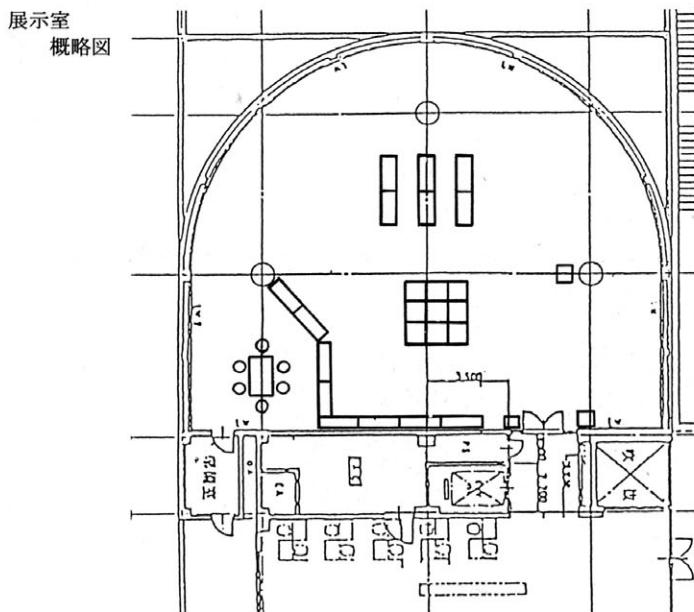
葉鎖の間に配し、手甲は海鼠手甲とし、表菊に瓜輪型の臂金物。手甲に鍬形模様を付す。裏地は鈍色の絹布。鞋は象牙。緒は白糸丸組。

佩楯は伊予佩楯で、黒漆塗、金箔押革小札を横に一八枚、縦に五段を交互に重ね形式で家地に綴じ付ける。札頭に於女里を伏せた絵韋の一文字韋。家地・裏地は籠手に同じ。小猿革は藍地菖蒲韋で、鮫具摺と同素材。鞭差の穴を備える。

臑当は鉄鑓目五本簾臑当。五本格子鎖繋ぎで、立挙は亀甲金を、白地に紺雪模様の綾の家地で覆い、白糸の菱綴、白糸の這せ糸、白紗の沓込。裏は鈍色の絹布。鮫具摺は藍地菖蒲韋。緒は家地と同じ。

## 金沢大学資料館からのお知らせ

- 金沢大学資料館前館長貞末堯司文学部教授の転出にともない、後任として今井治男教育学部教授が平成4年4月より館長に就任しました。
- 懸案の古文書、小中屋文書を整理し目録を11月1日刊行しました。御希望の方は資料館準備室(64-5215)まで申し込んで下さい。
- 医学部より故志賀 潔博士の揮毫額が寄贈されました。特別展に陳列する予定です。
- 資料館展示室では、特別展「資料館収蔵資料と現代版画」を1月18日より29日まで開催の予定です。出品作品は、前田利為・志賀 潔・林銑十郎等の書のほか、国語教室の協力を得て中国清朝の書や、現在活躍中の書家の作品、また日本画の広田百豊、油絵の遠田運雄・水谷清・北濱 淳の作品、版画では福沢一郎・小磯良平・駒井哲郎・山口薰等々の作品を展示する予定で、これに彫刻、あるいは陶芸も加えて開催する計画を立てています。多数の御来館をお待ちしています。入館は図書館入り口からとなります。図書館受付でお問い合わせ下さい。
- 資料館展示室では、平成5年度の資料展示、または資料に関する講演会等の企画を受け付けています。年間計画を立てていますので希望の方は早めに申し出て下さい。(但し、部局・研究室主催のものに限ります。)



---

### 金沢大学 資料館だより〈第4号〉

---

発行日：平成4年12月10日

印 刷：田中昭文堂印刷株式会社

発行所：金沢大学資料館

〒920 金沢市小坂町中75 Tel 0762-52-7788

〒920-11 金沢市角間町 Tel 0762-64-5215

---